

特集

スポーツと男女共同参画

変化するオリパラ、多様性の実現に向けて

東京2020を振り返って

コロナ禍での開催となった東京2020オリンピック・パラリンピック。この大会では、ジェンダー平等の実現に向けて様々な取組が展開されました。今回は、男女共同参画の視点から、今大会の世界的な特徴や実績を振り返るとともに、今後の課題等を見てい

きましょう。

32回目の夏季大会となった今大会では、女性選手の割合が歴代の夏季大会で最も高い48・8%（図1）でした。パラリンピックでも、約4割の選手が女性で、選手数・割合ともに2016年リオ大会を上回りました。史上最多の女性選手が参加したパラリンピックであり、少しずつジェンダー・バランスが改

善されています。

競技形式に着目すると、卓球のダブルスや陸上競技のリレーをはじめ、数多くの競技で男女混合種目が実現し、話題となりました。その種目数を前回大会と比較すると、オリンピックでは9種目から18種目に、パラリンピックでは38種目から40種目に増加しています。

また、国際オリンピック



委員会（IOC）は、国内オリンピック委員会（NOC）が選手団を構成する際に、女性及び男性のアスリートを最低1人ずつ含まなければならぬことを決議しました。同時に、NOCご

エトセトラ VOL.6 スポーツと ジェンダー （エトセトラブックス）

フェミニズムを身近なテーマから考えるマガジン「エトセトラ」で、スポーツが取り上げられた号です。



よくわかる スポーツと ジェンダー （ミネルヴァ書房）

スポーツの場面における、性に関わる人権問題を取り上げた一冊です。



パステル
おすすめ本

